

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「アジア文字研究基盤の構築1：文字学に関する用語・概念の研究」（平成30年度第2回研究会）

日時：平成30年10月6日（土曜日）午後13時30分より午後17時、10月7日（日曜日）午前8時30分より午後15時

場所：AA研マルチメディア室（304）

報告者名（所属）

10月6日

1) 荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクトの進行状況について」

(On the joint-research project)

今年度の活動計画を説明・検討するとともに、本プロジェクトに関連する科研費の応募について試案を示した。

2) 永井正勝（AA研共同研究員，東京大学）

「改行が語るもの—古代エジプト語文書を利用した文献言語における単位の再考」

(What does the end of the line tell us? : Reconsideration of the linguistic units in the written language in Ancient Egyptian Texts)

改行とは行の区切りのことだが、それは同時に表記の区切りでもある。表記の区切りという環境に直面し、古代エジプトの書記達はどのように対応していたのであろうか。発表者は神官文字で書かれた中エジプト王国時代のパピルス写本8点を資料として、改行箇所の調査を行った。その結果、語末で改行される事例が多数を占めることがわかった。一方、語中で改行される事例もあるが、その場合でも、語幹と限定符の間、語幹と接辞の間での改行が見られる。これらのことから、古代エジプトの書記が、語という単位に加えて語の構成要素についても認識していたことがうかがえる。

3) 荒川慎太郎（AA研所員）

「アジアの文字研究からみた文字学用語(1)」

(Terms of studies on scripts from the studies on the Asian scripts (1))

『言語学大辞典』（術語編）などにおいても、文字学に関係する術語・概念の項目は十分なものとは言えない。今回は「限定符」「書字方向」などについて、これらが辞書項目として記載されるならどのようにすべきか、まず報告者が事前に試案を示し、さらに当日、参加者から意見・実例を提供してもらい内容の拡充を行った。

10月7日

4) 全員

第3回研究会を開催するか否か、また特別企画に関する打ち合わせを行った。

5) 澤田英夫（AA研所員）

「東南アジアにおけるインド系文字の革新」

(Innovations brought to Indic scripts in Southeast Asia)

東南アジアの諸民族はブラーフミー文字の流れをくむインド系文字を受容し、アーリア系言語の表記という本来の用途を保持しつつ、自言語の表記にその文字を流用した。インド系文字はアーリア系言語の音体系に適応したものであったため、それと大きく異なる東南アジア諸言語の音体系に適応させるために、(1)既存の文字要素で適切に表記できない自言語の音をどうするか、(2)自言語の音を表記するのに不要な既存の文字要素をどうするか、

の2点をクリアする必要があった。(1)への対応として、既存の文字要素の枠内でむりやり表記するか、新しい文字要素や組み合わせを導入するかの選択が行われ、(2)への対応として、不要な文字要素を条件付きで残すか、あるいは廃するかの選択が行われた。また、対象言語の音体系により適した文字体系への移行も行われた。